

2018年10月28日、東村山市にある多摩全生園・国立ハンセン病資料館にて校外学習会が行われました。今年度のハンセン病校外学習会の開催は2回目です。今回も、現在 ELM 運営委員であり東京地裁ハンセン病訴訟原告弁護団副団長でもあった鈴木利廣名誉教授（弁護士・明治大学学長特任補佐）の引率のもと、ハンセン病当事者である講師・森元美代治さん（IDEA ジャパン代表）のお話を伺いました。

資料館の展示を見る際は、森元さんが解説を下さいました。まず初めに、ハンセン病資料館設立の経緯・歴史の説明があり、当時の苦勞を知ることとなりました。

次に、昔の園にあった、患者の逃走を防ぐ目的で設置された柵の垣根やコンクリート壁の写真を見ました。乗り越えていく患者もいたとのことで、森元さんも乗り越えた人の中の1人であったそうです。

そして、園内の当時の消防団の道具と映写機を見ました。昔は差別のために消防署や外の人たちが来てくれなかったから、消火活動も娯楽も自分たちで行ったとのことでした。

その次に、歴史展示コーナーで説明を聞きました。古くは仏罰、天刑と呼ばれ医学的な問題だけでなく宗教上の問題でもあったこと、無癩県運動の際は家族も連れて行かれたこと、患者が連れて行かれる際は貨物列車で運ばれたこと、辛いことばかりではなく素晴らしい医師や看護師も中にはいたこと、国賠訴訟の時のことなどを森元さんから伺いました。

その後の展示物コーナーでは、園内の通貨、患者たちが過ごした部屋（男子独身寮）の再現、全国から「特に反抗的」とみなされた患者が懲罰のために送られた重監房の再現などを見ました。その際、森元さんからは、男女の行き来や恋愛は禁止だったこと、禁止しても守られないために法に基づかない断種手術が行われていたこと、裁判の際に重監房に入ったことのある患者に会ったことがあること、ご自身が園から逃げだして大学へ通われた際の苦勞などを伺いました。

続く文芸品の展示コーナーでは、点字を舌読で読む患者の写真、ハーモニカ楽団の映像、窯、手芸品、盆栽、小説などを見て、患者たちの生きがいは何であったかを知ることとなりました。

資料館の展示を見学した後は、広大で緑いっぱいの多摩全生園敷地内を歩いて見学しました。納骨堂を見た際は、「もういいかい 骨になっても まあだだよ」という川柳が存在すると鈴木先生の説明を受けました。尊厳回復の碑は2006年に出来たもので、当時強制的に中絶や嬰兒殺しが行われていた際のホルマリン漬けにされた胎児や乳児の埋葬であるとのことでした。望郷台は、園内から出られない中、故郷の方角を見るために土を盛って作られたものであるとのことでした。教会やお寺の宗教地区や園内にあった学校の跡も見て廻りました。

最後に、森元さんの奥様もお見えになり、敷地内の食堂で全員でお茶をしながら懇談をしました。参加者の自己紹介と感想が述べられた後、森元さんから様々なお話がありました。特に印象に残ったのは、裁判前、断種手術等人権侵害の被害についてなかなか話してくれる人がいなく、特に名乗り出る女性は少なかったとのことですが、それが裁判を通し

て変わったということ、すなわち裁判がきっかけで話すようになり色々な人が出てきてくれたこと、またその過程についてでした。ご自身の経験や具体的なエピソードと共に、森元さんはたくさんのお話を語って下さいました。

今回もたくさんの方の参加者(20名)が集まり、大盛況のうちに校外学習会を終えることとなりました。今までに何度か多磨全生園・国立ハンセン病資料館に来たことがある参加者もあり、その度に新たな発見も多くあるため、リピーターの多い行事となっております。この度も貴重なお話とたくさんの方の学びを通して、ハンセン病について深く考える機会となりました。





